

レジリエンスの諸相

—人類史的視点からの挑戦—

奈良由美子 放送大学教授

稲村哲也 放送大学教授

The Open University of Japan



放送大学教材
1910035-1-1811

コラム

グローバル問題としての過疎・離農問題への
実践型地域研究による国際協働の取り組み

安藤 和雄（京都大学東南アジア地域研究研究所）

2011年8月5、6日にかけて、坂本龍太さん（当時総合地球環境学研究所、現東南アジア地域研究研究所）と私は、総合地球環境学研究所の高所プロジェクト（代表：奥宮清人さん）の関連で招聘したブータンのタシガン県の行政のトップであるゾンダ（県知事）のルンデン・ドルジさんとブータン政府保健省医療局局長のドルジ・ワンチョックさんと他の3名のブータンの方の計5名の皆さんとともに、京都府南丹市美山町知井地区のかやぶきの里の北集落、過疎化が進行し杉が植林された水田が谷に広がっている知見集落を視察した。

美山町の過疎の現状に対してルンデン・ドルジさんは「安藤さん、美山町の過疎（都市への移住）の進行は、ブータンでも同様の問題を抱えていて、現在ブータンの国王がもっとも気にかけている問題の一つでもある」と教えてくれ



図15-4 2012年9月27日、南丹市美山町知井地区北集落を訪問したブータン王立大学の総長一行らとの記念写真

た。「過疎」の深刻な進行がブータンにも起きていることを知らされた。それまでに私は3回ほどブータンを訪問していたが、まったくこの事実には気づくことがなく、農村人口が今でも7割をしめ、農業が国の産業の柱であるブータンで、都市への人口の集中が起きていることにショックを覚えた。長年ブータンの現地調査をしている友人達からもこの問題を聞かされたことがなかったのだ。ブータンは一人当たり国民総所得が1,920米ドル（世界銀行 2010）であるが、国民総生産（GDP）にかわり国民総幸福量（GNH）を開発の柱としており、2005年の国勢調査で国民の約97%が「幸せ」と回答していることから、ブータンと「過疎」を結びつけて考えることが、私には全く思いもよらなかった。

私が所属している京都大学東南アジア地域研究研究所は、2011年6月にブータン王立大学・Sherubutse College（シェラブツェ校）と学術交流協定を締結し、共同研究をタシガン県のカリン郡で始めていた。そこで、中心課題の一つに「過疎」の問題をとりあげ、実態調査を行うこととした。2011年12月には、私を含めた日本人メンバー3名とシェラブツェ校の若手教員および学生達とともにカリン郡の郡役場に自炊で泊り込み、2週間あまりの世帯調査を行い、その後もシェラブツェ校の共同研究者たちによって補足調査が継続された。その結果の一部は2012年9月にシェラブツェ校で開催された農村開発に関する国際ワークショップや、同年10月30日に丹後半島で地元の人々と共同開催した農村開発国際会議「草の根 棚田フォーラム イン丹後」において発表された。

ブータンでは住民票は基本的に生まれた村、あるいは嫁いだ主人の出身の村に置かれるのが一般的である。したがって、現在居住している人たちを調べれば、村から出ていった人たちを把握することは住民台帳を見せてもらえればそんなに難しいことではない。私たちの調査地であるカリン郡では約半数の人口が流出しているという結果が得られた（Jamyang Choda 2012）。そのデータがシェラブツェ校でのワークショップで発表された時に、同校の他の教員からそれは調査の間違いではないのか、というコメントがでたほど、2012年の時点では、「過疎」に関する事実認識はブータンでも一般的ではなかったといえるであろう。

2011年にブータンの第5代国王と王妃が来日され、日本でブータンブームが起きたが、特に過疎が進む日本の中山間地の人々にとって、GNHを発展の目的とするブータンの存在は希望の灯となった。知井振興会でも、平成23年度臨

時総会の知井振興会活動総括において、知井振興会がブータンから多くのことを学ぶ姿勢を鮮明に打ち出した。そして、2012年9月27日にブータン王立大学学長他4名、2012年10月23日にはシェラブッチェ大学講師他2名が知井振興会事務局を訪問し、2013年7月にシェラブッチェ大学から若手研究者4名を知井振興会傘下の佐々里集落に約1カ月間受入れ、参加型学習と実践調査(PLA: Participatory Learning Action)を行うことが最終的に合意され、2013年7月4日から31日までの間、佐々里集落において調査を実施した。調査の目的は、ブータンの若手研究者にはブータンで進行しつつある「過疎」や「離農」の現実の先にある「結果」についての具体的なイメージをもってもらい、佐々里の住民や知井振興会の関係者と直接接することにより、対策の可能性を探ってもらうことにある。一方、佐々里の人々や知井振興会の役員の皆さんには、ブータンの若者が佐々里で何を見、感じ、学んだかを聞くことによって、日本の枠内に留まることなく、世界、とくにアジアから「過疎」「高齢化」「離農」「耕作放棄地」などの問題を捉えてみることで、新しい考え方、見方をもつ契機にしてもらいたいと願ったのである。

アジア各国、なかでも、私が訪問したバングラデシュ、ミャンマー、ラオス、タイ、インド東北部、中国雲南省などでも、農村から都市への移住という「過疎」や若者の農業離れという「離農」の問題は顕在化しつつある。問題の原因や背景は、国や地域によって個別な違いがあるが、現象としては、世界、すくなくともアジア諸国が共通して認識すべきグローバルな問題となっている。温暖化問題や地震、津波、洪水などの自然災害、貧困などに並ぶ問題であろう。日本では、1960年代の高度経済発展の時代に顕在化した過疎問題は経済発展にともない避けて通れない現象であると学術的、理論的に説明され、それが常識的な理解となっている。そうした背景も影響しているのか、この問題は現在も克服できておらず、状況は厳しさを増し、具体的で有効な手段が立てられないままに現実には進行している。

これまで「過疎」「離農」の問題解決に有効な手段がとられてこなかった大きな要因の一つは、上記の常識の他に、この問題が「地域の問題」として位置づけられ、対策を立ててきた側と問題が発生している地域(農村)が当事者性を共有できる枠組みが立てられていなかったからであろう。問題克服への壁が常識の側にあるかぎり、その常識を破るためには、理論という客観性ではな

く、問題克服が必須であるとする当事者性があると私は考えている。日本の「過疎」「離農」の問題を世界に開くことによって、日本やブータンの常識を相対化する、これまでとは異なった発想による具体的な対策が生まれることが期待される。常識を相対化できる「グローバルな問題」と位置づけられるためには、現実認識が実践を通じて確信となることによる当事者性の共有が必須である。そのため、この問題に取り組んでいくための実践型地域研究の手法をブータンと日本で模索し始めた。

シエラブッチェ大学講師ソナム・チョルゲルさん（男性・30歳代）、ポブラモさん（女性・20歳代）、若手研究員のソナム・ザンポさん（男性・20歳代）とチェワン・チョデンさん（女性・20歳代）、通訳兼コーディネーターとして同志社大学博士課程院生の渡邊美穂子さんがほぼ1カ月間佐々里の農家民宿に宿泊した。私は8泊し、日帰り調査を含め3週間前後ファシリテーターとして調査に参加した。

佐々里集落は、現在居住は10世帯、人口17名、高齢化率65%である。ブータンの4名と渡邊さんは10世帯すべてを訪問し、高齢者から過疎などの問題やこれまでのライフ・ヒストリーについて会話型の簡単な調査を行った。そのほか、図15-5のように知井振興会が計画した交流事業に積極的に参加した。



図15-5 2014年7月4日、南丹市美山町知井地区佐々里集落でのブータン王立大学シエラブッチェ校からの4名の歓迎会

知井振興会の調整によって、植樹活動、高齢世帯への訪問、サロンとよばれる昼食会への料理もちよりによる地域の人たちとの懇談会などの地域との交流計画がつくられ、この計画にしたがって地域交流が図られていった。また、各世帯への訪問、朝夕の道や田畑での出会いのほか、さまざまな交流会での村人との会話から、ブータンの方々と村人や私たち日本人のPLA参加者は、お互いに学び、刺激しあうことができた。7月30日の知井振興会主催のお別れ会に先立ち、佐々里集落住民と知井振興会役員の皆さんに対する帰国報告会「佐々里で見たこと、聞いたこと、学んだこと」において、今回のPLAの成果が発表された。その様子は、京都新聞2013年8月10日朝刊『限界集落で「幸せ」探る』で特集された。以下がその要約である。

4名のブータンの参加者は、佐々里の特徴として「人の心の温かさ」、住民が佐々里にとどまる理由として「佐々里に住むことに誇りを感じているからでは」、佐々里はコミュニティのつながりが強く、潜在的な経済力もある。持続的な経済発展、環境保全などを柱とするGNHの観点から見れば、理想的な状況にある」などの意見を成果として要約した。それを受けて、佐々里の林英夫区長は「ブータンと日本の価値観にはギャップがある。佐々里の人が現状を幸せか、と問われればそれは違うと答えるだろう」と話す。しかし、来年も継続するブータン研究生受け入れに向け、「次に来る人に恥ずかしくないよう、佐々里を良くしていかないと。前向きに一つ一つ地道にやっていくしかない」と決意を新たにした。最後に「ミャンマーやタイなどでも若者の離農が顕著になってきている。過疎は国際的な視点で考えないといけない問題。アジアの村が未来を模索する手本に、佐々里がなってほしい」と、住民にエールが送られた。

引用文献

Jamyang Choda 2012 Rural out-migration scenario in Khaling Gewog, Trashigang, Eastern-Bhutan

注) 本コラムは、安藤和雄 2013「グローバルな問題としての過疎・離農問題—ブータンと日本における実践型地域研究の取組—」『熱帯農業研究』6 (Extra issue 2): 85-86. を修正加筆した。

放送大学教材 1910035-1-1811 (テレビ)

レジリエンスの諸相 —人類史的視点からの挑戦—

発行 2018年3月20日 第1刷
編著者 奈良由美子・稲村哲也
発行所 一般財団法人 放送大学教育振興会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政福祉琴平ビル
電話 03 (3502) 2750

市販用は放送大学教材と同じ内容です。定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN978-4-595-31865-8 C1360